

People
Joanna Piotrowska's Photographs Make Our
Quotidian World Appear Uncanny and
Unsettling—and the Art World Can't Get
Enough

The Polish artist's work is featured in this year's Venice Biennale.
Deborah Luster, July 25, 2022



ジョアンナ・ピオトrowskaは、沈黙が持つ奇妙で矛盾した力を使って作品を制作している。声なき身体は触れ、硬直し、服従する。女性は鎖骨の上で最も無防備な場所を示している。人々は異常な方法で交流する。飼育されている動物を刺激するための玩具を撮影するなど、モノのイメージも不気味だ。その他にも、2015年にピオトrowskaがスパイ容疑で告発され、尋問を受けたアルメニアとアゼルバイジャンの紛争地域で撮影されたバラは、繊細に垂れ下がっている。

1985年にポーランドで生まれ、現在はロンドンを拠点に活動するこの高名なアーティストは、抑圧的な社会的・心理的な構造をグレースケールで検証している。ここ数年、ピオトrowskaは MoMA、ロンドンのテート、クストハーレ・バーゼルで相次いで大規模な展覧会を開催し、驚くほど多忙な日々を過ごしている。現在、彼女の作品はヴェネツィア・ビエンナーレで展示されているほか、ハノーバーのケストナー・ゲゼルシャフト美術館とアテネの非営利団体 ARCH で個展が開催されています。9月にはリヨンビエンナーレに参加し、2023年3月には東京のHagihara Projectsで個展を開催する予定だ。

ピオトrowskaの作品は、モノクロ写真とフィルムの上に位置し、記録されたパフォーマンスや彫刻と比較される。ピオトrowskaは Artnet News に「写真を見ることができる領域、あるいは少し違った新しい形で存在できる領域を見つけることは、いつも本当にエキサイティングなことです」と語る。

ピオトrowskaは、非言語への興味（写真は最初に「ある種の静寂」のために興味を持った）と共に、文章で表現することも楽しんでおり、文学もまた彼女の情熱の一つである。最初はビデオ通話で話すことに抵抗があったピオトrowskaは、1つの質問に1日を費やすことができる書面インタビューをする傾向があると指摘した。そして、「私はとてもゆっくりと仕事をし、あらゆる角度から物事を見ようとします」と語った。最終的には、質問に対する回答を書き出し、それ以外の質問には電話で答えるという、両方をこなした。

その姿勢は、彼女の作品制作のプロセス全体に表れている。ピオトrowskaの写真やフィルムのインスタレーションは、常に「徹底的に考え抜かれ」と、彼女の長年のディーラーであり、ロンドンのサウザード・リードの共同設立者であるフリダ・リードは言う。彼女はピオトrowskaを、「離れていても... その中の心理や人間の要素を構成するすべての感情を完全に理解できる」高機能なアーティストと表現している。

近くて遠い

ピオトロフスカの作品には、「離脱」という概念が密接に関係しており、彼女の自由な描写は、奇妙に詩的でガイドブック風の実演を連想させる。女性や少女が護身術のポーズをとる写真シリーズは、男性が同じポーズをとっている取扱説明書から着想を得ている。

「レンズを覗き込むと、他の種族を見ているような気がする」とピオトロフスカは言う。モノクロ写真は、“そういう冷めた観察にマッチする”と作家は言う。

ピオトロフスカは、「観察」と呼ぶ独特のスタイルで個人を強調しないことで、自分の関心事に迫ることができる」と説明している。「私たちは皆、自分たちが作り出した抑圧的なシステムにどのように参加しているのか」

しかし、人生と同じように、彼女の手の届く範囲でのアプローチには、相反する親密さの感覚も生まれる。「この2つはとても密接な関係にあると思います。私が取り組んでいることは、すべて個人的なことであり、私の心の中にあるものなのです」。

彼女のアートワークにおいても、物事は最初に見たとおりのものではない。Frowst “シリーズは、息苦しいほどの“stuffiness”や“coziness”を意味するタイトルで、家族メンバーが家の中で、ぎこちなく、時には不穏な物理的距離に置かれている様子が描かれている。このプロジェクトは、彼女が保守的で厳格な社会と評するポーランドで育った経験に由来している。このプロジェクトは、「家族という制度」に内在する矛盾に目を向けている。この制度は、「非常に豊かで協力的である一方で、しばしば、非常に隠された方法で、非常に抑圧的な環境にもなり得る」と作家は述べている。

ピオトロフスカは、女性の権利や人工妊娠中絶についても積極的に発言しており、ポーランドでは限定版の写真を寄付して資金集めをしていた。彼女の作品は、政治的な話題でありながら、その裏に潜んでいるものをうまく表現している。「政治について考えるとき、私は曖昧さ、ニュアンス、隠された、抑圧された、間接的、堅苦しい、などの概念について考えるので、私の作品の中で政治的な主題がどのように表現されるかにそれらの概念が現れることは理にかなっています」と彼女は書いている。

ARCH で開催中の展覧会「Sub Rosa」では、アルメニアとアゼルバイジャンの紛争地域であるナゴルノ・カラバフで撮影したバラの写真を展示しているが、ピオトロフスカは、戦闘で破壊され、花が生い茂った廃墟の町を撮影する際に、憲兵につけられたことを記憶している。彼女は軍警察から激しい尋問を受けた。

「同時に、撮影を続けることを強要されました。このままではいけないと思い、自分を検閲し、紛争や政治的な側面から目を背けることにしたのです。唯一安全な被写体は花だったので、バラの写真を撮り始めたんです。」

視認性

2013年にロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートを卒業して以来、ピオトロフスカは着実に評価を高めている。「彼女はアーティストのアーティストです」と、ピオトロフスカの代理人でもある Galerie Thomas Zander のディレクター、Natalie Gaida は言う。「キュレーターは皆、この作品が好きですから」。ピオトロフスカと同世代の若いミレニアル世代を含むコレクターは、彼女のアーティストとしての繊細さに惹かれるのだという。

ディーラーである Southard Reid と Galerie Thomas Zander は、ピオトロフスカの作品は常に満たせないほどの高い需要があると語っています。(ポーランドのギャラリー Dawid Radziszewski やポルトガルの Galeria Madragoa とも仕事をしている)。転機が訪れたのは、2018年の MoMa での展示と、2019年のテート (イギリス) とクンストハーレ・パーゼルでの二本立ての展示の頃であった。

“彼女のコレクターはとても特別です”とガイダは言う。“彼らが彼女の作品を買うとき、それは本当に心からのもので、投資のためだけではない、それは良いことだ”。

ピオトロフスカの銀塩プリントは、1枚から7枚までの少量限定版と、アーティストプルーフで提供されています。また、単品でも購入できますが、美術館のインスタレーションのように、5枚の作品からなるユニークなグループで販売されることが多いようだ。価格は作品群で 5,000 ユーロ (5,078 ドル) から約 50,000 ユーロ (50,782 ドル)。

彼女の作品は一般的にヨーロッパでより多く見られるが、これはちょうどパンデミックの時期に彼女の認知度が上がり、渡航制限がかかってヨーロッパ大陸に留まったためだとガイダは考えている。しかし、この状況は変わりつつある。今年初めの Frieze LA でピオトロフスカのソロブースを展覧したリードは、「当初からアメリカから着実に (ピオトロフスカの作品が) 収集されています」と指摘する。

「サブ・ローザ」で声を上げる

ナゴルノ・カラバフでのトラウマを作品という形で初めて表現したピオトロフスカは、「『Sub Rosa』は実は私の最もパーソナルな作品であり、初めてのコラボレーションでもある」と語る。Formafantasmaのデザイナーと一緒に、鉄で取調室のような彫刻的なフレームを作り、ピオトロフスカのバラの写真を囲み、押さえた。プリントはガラスに覆われておらず、時に丸まって金属製のバリア／フレームに覆いかぶさっている。

このシリーズは「私にとって重要な作品であり、写真をどのように彫刻的に見せることができるかという私の興味の自然な延長線上にある」とピオトロフスカは語っている（彼女はすでに様々な表現をしてきました）。「イメージをどのように設置するかは、常に私の実践の大きな部分を占めており、私は常に最初に空間を扱うのです」と彼女は言い、イメージを構築することは二の次で、この行為をパフォーマンスに例えた。

さらに、「7年間抱え込んでいた」ピオトロフスカは、「Sub Rosa」によって、「誰にも頼ることができなかった」ナゴルノ・カラバフでの経験や、「弱者で声なきもの」と感じた経験を「自分のものにする」ことができたと言った。この未承認地域には、ポーランド大使館も英国大使館も、国際機関も存在しない。

この新しいシリーズは、10月のフリーズの時期にロンドンのサウザード・リード・ギャラリーに巡回する予定だが、「自己検閲や自分自身を沈黙させることが、逆に何か大きな声へと変化したのです」。

ピオトロフスカは、ある時、私に答えるために書いた手紙で、自分のアート活動を「人生によって動かされる」ものだと表現した。直感的で、合理的な思考に先立つ、生きた経験に由来する「発火の瞬間」を求めているのだという。「身体で感じたり、目で見たり、子供が遊んでいるのを見たり、警察の取り調べを受けたり、兄弟が抱き合っているのを見たり、そういうことです。日常の何気ない状況や仕草の中に、たくさんの意味が隠されているのです」。

Joanna Piotrowska works with the strange, contradictory power of silence. Voiceless bodies touch, stiffen, and submit; a woman indicates where she is most vulnerable on her collarbone. People interact in unusual ways. Her images of objects are similarly uncanny: she photographs toys used to stimulate animals in captivity. Elsewhere, roses photographed in a dispute conflict area between Armenia and Azerbaijan, where Piotrowska was accused of espionage and interrogated in 2015, delicately droop.

The acclaimed artist, born in Poland in 1985 and now based in London, examines oppressive social and psychological constructions in grayscale. The last few years have been incredibly busy for Piotrowska, with a string of major shows at MoMA, the Tate in London, and Kunsthalle Basel. Currently, her work is on view at the Venice Biennale, and she is also the subject of solo shows at the Kestner Gesellschaft museum in Hannover and the nonprofit ARCH in Athens. In September, she will be included in the Lyon Biennale, and she is working on a solo show set for March 2023 at Hagiwara Projects in Tokyo.

Piotrowska's work operates between black-and-white photographs and film, drawing comparison to documented performance or sculpture. "It's always really exciting to find those territories in which photography can be seen or can exist in a slightly different, new form," Piotrowska told Artnet News.

Along with Piotrowska's interest in non-verbal language (photography first intrigued her for a "certain kind of stillness"), she also enjoys expressing herself in writing, and literature is another one of her passions. At first reluctant to speak over a video call for this story, Piotrowska noted that she tends to do written interviews where she can spend one day on each question. "I work very slowly and try to look at everything from all possible perspectives," she said. In the end, she did both: writing out responses to questions and speaking over our call to answer others.

That tuned-in approach is evident in her entire art-making process. Piotrowska's installations of photographs and films are always "thoroughly thought-through," and mapped out, said her long-time dealer Phillida Reid, co-founder of Southard Reid in London. She described Piotrowska as a high-functioning artist who "can be detached ... but completely understand all of the emotions that make up the psychology or human elements within it."

Close and Far

The idea of detachment is inextricable to Piotrowska's work, with her unfettered depictions which are reminiscent of oddly poetic, guidebook-style demonstrations. It is no coincidence: her photographic series of women and young girls posing in positions of self-defense were inspired by an instruction manual, which featured men in the same poses.

"When I look through the lens, I sometimes feel like I'm looking at some other species," said Piotrowska. The artist said that black-and-white photography "matches that kind of cold observation."

By deemphasizing the individual with her strikingly unique style of detachment and what she calls "observational" aesthetics, Piotrowska explained that she's better able to get at what she's interested in: "how we all participate in oppressive systems we create."

But like in life, with her arms' length approach comes its contradictory opposite, a sense of intimacy. "I think those two are very close," she said. "Everything I work on is quite personal and close to my heart."

In her artwork too, things are not what they first seem. In the series "Frowst" a title that refers to a suffocating "stuffiness" or "coziness," family members are seen in the home, placed in awkward and sometimes disturbing physical proximity. The project stems from her experiences growing up in Poland, a nation she described as a conservative and rigid society. It looks at the inherent contradictions of "a family institution," which the artist said can "be very enriching and supportive, but also often an environment which is quite oppressive, in quite concealed ways."

Piotrowska has also been vocal about women's rights and abortion access, donating limited-edition photographs to raise money for the cause in Poland. Her work manages to address hot political topics through lurking overtones. "When I think about politics, I think about notions of ambiguity, nuances, hidden, repressed, indirect, stiff or rigid, so it makes sense that those notions appear in how political subjects are represented in my works," she wrote.

For her current exhibition "Sub Rosa," at ARCH, which includes photographs of roses taken in the disputed region of Nagorno-Karabakh between Armenia and Azerbaijan, Piotrowska remembers how military police followed her as she documented an abandoned town, destroyed by fighting and overgrown with flowers. She was subject to intense interrogations by officials.

"At the same time, I was forced to continue photographing," she said. "I didn't want to worsen my situation, so I decided to censor myself, and turn away from the conflict, or any political aspect of that place. The only safe subject was flowers, so I started photographing roses."

Visibility

Piotrowska has steadily gained recognition since graduating from the Royal College of Art in London in 2013. "She's an artist's artist," said Natalie Gaida, director of Galerie Thomas Zander, which also represents Piotrowska. "I think the main interest came [early] from museums, because all curators love the work." She said that collectors—including younger millennials of the artist's generation—are drawn to how sensitive she is as an artist.

Both dealers Southard Reid and Galerie Thomas Zander said Piotrowska's work is in high demand that cannot always be met. (The artist is also working with Polish gallery Dawid Radziszewski and Galeria Madragoa in Portugal.) A turning point occurred around the time of her 2018 MoMa show, and the 2019 double-whammy at Tate, Britain and Kunsthalle Basel.

"Her collectors are very special," said Gaida. "When they buy her work, it's really from the heart, and not only for investment, which is good."

Piotrowska's silver-gelatin prints are offered in small, limited editions of between one and seven prints, plus artist's proofs. And while they can be acquired individually, they are often sold in unique groups of five works akin to her museum installations. Prices range from €5,000 (\$5,078) to about €50,000 (\$50,782) for groups of works.

Her oeuvre is generally more visible in Europe, an observation Gaida attributes to her broader recognition occurring right around the pandemic, while travel restrictions held her to the continent. But this is changing. "From the outset there's always been steady

collecting [of Piotrowska's work] from America," noted Reid, who showed a solo booth of Piotrowska's works at Frieze LA earlier this year.

Finding Voice with 'Sub Rosa'

Channeling her traumatic experience in Nagorno-Karabakh for the first time in this form, Piotrowska said "'Sub Rosa' is actually my most personal work," and her first collaboration. Together with the designers at Formafantasma, she created interrogation-room sculptural frames out of steel, which enclose and hold down Piotrowska's rose photographs. The prints are not covered by glass, and sometimes curl up and around the metal barrier/frames which smother them.

The series is "an important work for me, a natural continuation of my interest in how photography can be presented in a sculptural way," said Piotrowska—something she has already done to various degrees. "How the images are installed was always a huge part of my practice, and I always work with the space first," she said, likening the act to a performance, where constructing the image is secondary.

In addition, "after seven years of holding it in," Piotrowska said "Sub Rosa" allowed her to "take ownership" of the experience in Nagorno-Karabakh, where "there was nobody I could turn to for help," and where she felt "vulnerable and voiceless." There is no Polish or UK embassy, or international organization in the unrecognized region.

With this new series, which will travel to Southard Reid gallery in London in October around Frieze, "the self-censorship, and silencing myself became something opposite... It's been transformed into something quite vocal."

Writing to answer me at one point, Piotrowska described her art practice as one "driven by life." She said she seeks a "moment of ignition" that stems from lived experiences, a moment which is intuitive and precedes rational thinking. "Sensing with the body or looking with my eyes, seeing children playing, being interrogated by the police, looking at brothers hugging," are such instances, she said. "There is so much hidden meaning in the everyday, in simple situations, gestures."